

PDF issue: 2025-05-29

吉岡実「僧侶」試論: 四人の僧侶か住んでいる場所

叶, 真紀

(Citation)

国文学研究ノート,36:45-55

(Issue Date)

2001-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/81012345

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012345



吉岡実「僧侶」試論

――四人の僧侶が住んでいる場所 –

はじめに

「僧侶」は一九五七(昭和三二)年に執筆され、同年四月、「僧侶」は一九五七(昭和三二)年に執筆され、同年四月、最初に執筆され発表された「僧侶」を甚盤として、詩集『僧侶』に収められることになる「僧侶」以外の十八篇を書いている。そのうちの一篇、「苦力」を吉岡が谷川温泉宿で一夜にして完成させたというエピソードは、「苦力」の作品世界が既に吉岡の内部でどのように組み立てられていったのか、最初に執筆され発表された「僧侶」を基盤として、詩集『僧侶』ということを考えてみたい。また、今回は触れないが「「僧侶」は形の上でもそれまでのモダニズム色の残る口語自由詩とは一夜にして完成させたというエピソードは、「苦力」の作品世書いている。その後、吉岡実は第三書いている。その後、吉岡実は第三書いている。その後、吉岡実は第三書いている。その後、吉岡実は第三書いている。その後、吉岡寺に出るのである。その後、吉岡寺に出るのである。その後、吉岡寺に出るのである。その後、吉岡寺に出るのである。

ば絵巻き的であり絵画的」との評言がある。しかしながら、、また、詩集『僧侶』の中でも「僧侶」は、「他の詩に較べれ

ているが、吉岡の詩作品を論じるには個々の作品について考えから崩されてい」るとも指摘される。ある程度の評価が為され側から見ているという感覚』が次第に薄れ、「フレームが内側『僧侶』の時期の詩作品は、従来の作品の「視覚性というか外

叶

真

紀

が創り上げる世界を考えたいと思う。本稿では、「僧侶」を本文に沿って読み解いていき、「僧侶」

る必要があるだろう。

四人の僧侶のうち一人が殺された理由

一度目の死について見ていくこととする。
 一人の僧侶が「殺される」顛末が描かれ続ける。9の最後の僧侶は最後まで「死んだ」者として描かれ続ける。9の最後の僧侶は最後まで「死んだ」者として描かれ続ける。9の最後の一人の僧侶が「殺される」顛末が描かれている。そして、この一人の僧侶が「殺される」顛末が描かれている。1では「僧侶」は、アラビア数字1~9で区切られている。1では

ると書かれているのではない。あくまでも「棒の形」と書かれだと考えられる。「若い女」を折檻している道具が「棒」であ六行目は、「四人の僧侶」たちが「若い女」を犯している場面つまり「棒の形/憎しみもなしに/若い女を叩く」という四~の「棒の形」が示しているものは四人の僧侶たちの男根である。こまず、注目したいのは、1の四行目の「棒の形」である。こまず、注目したいのは、1の四行目の「棒の形」である。こ

させているのである。「黒い」僧服の裾を「巻きあげ」、性器を「棒の形」に固く変形でろ歩」いている際に「若い女」を見つけ、自分の手で筒状のぞろ歩」いている際に「若い女」を見つけ、自分の手で筒状のであり、 はらは 「庭園をそ彼らが「若い女」を輪姦していることが読み取れるだろう。また、三行目の「ときに黒い布を巻きあげる」の部分からも、また、三行目の「ときに黒い布を巻きあげる」の部分からも、

び声をあげるほど残酷であることが想像される。の行為は「若い女」が「こうもり」の鳴き声のような不吉な叫い始めた「こうもりが叫ぶ」夕刻まで続けられる。しかも、そ三好豊一郎氏も述べているように、彼らの行為は空に飛び交

侶たちは日常生活の行動をとっていることがわかる。
く/一人は自瀆」から、事件後、「殺され」なかった三人の僧ない。八〜十行目「一人は食事を作る/一人は罪人を探しにゆやはり「殺され」た一人は、他の三人と違う行動をしたに違いたちは四人とも全く同じ行動をとったように見えるけれども、たちは四人とも全く同じ行動をとったように見えるけれども、では何故、同じように「若い女」を輪姦した他の三人が「殺では何故、同じように「若い女」を輪姦した他の三人が「殺したは何故、同じように「若い女」を輪姦した他の三人が「殺した」

また、十行目の僧侶の行動が「殺され」た僧侶を考える上でまた、十行目の僧侶の行動が「殺された」僧侶は、一人だことにあるのではないだろうか。「殺された」僧侶は、一人だことにあるのではないだろうか。「殺された」僧侶が他の三人と違っていた点は「若い女」を犯したされていなかったと考えられる。とにあるのではないだろうか。「殺された」僧侶は「若い女」を犯し大きなヒントとなるだろう。十行目の僧侶は「若い女」を犯し大きなヒントとなるだろう。十行目の僧侶は「若い女」を犯し大きなヒントとなるだろう。十行目の僧侶が映楽を得てしまった。

その世界の中で「僧侶」の身分を剥奪されることほど、四人の意義を奪われてしまったのである。ここは僧侶の世界であり、「若い女」に生命を奪われたのではなく、「僧侶」としての存在体から得られる快楽に身を委ねてしまったためである。つまり、本来、聖職者である僧侶は快楽が禁じられている身である。

の快楽によって彼らが僧侶の身分を剥奪されることはないだろるように、快楽に浸りきった生活を送っている。けれども、こな禁欲的とは正反対の僧侶たちの食生活(3)からも指摘できな罪の意識はかけらもない。「酒」や「飽食のため肥」るよう犯した四人の僧侶たちに自分の身が汚れてしまったというようもちろん、快楽が禁じられているといっても、「若い女」を

僧侶にとって恐ろしいことはないだろう。

とってしまったのである。 行であると重々しい口調で言うに違いない。つまり、快楽であ と違う姿になって味わうスリルや、ただ「鐘をうつ」ことしか 僧侶たちは「鳥」、「魚」、「馬」の「姿」に変身して「苦行に出 行に出かける」場面を想起されたい。「死ん」でいない三人の う。何故なら、自分以外の誰かに、僧侶たちの生活が快楽であ れ」た僧侶は射精という肉体的快楽の証拠となるような行動を るという証拠が見つかりさえしなければいいのである。「殺さ もないだろう。けれども、三人の僧侶たちは揃って、これは苦 できない「死んだ」僧侶に対する優越感は、快楽以外の何物で わからないし、もしかしたら「女中」に捕まるかもしれないし、 かける」(4)。確かに、いつ「かりうど」に撃ち落とされるか ると断言されることはないからである。四人の僧侶が「朝の苦 「殺戮の道具」は非常に重い荷物かもしれない。 しかし、 普段

四人の僧侶が住んでいる場所

すると、 四人の僧侶たちの住む場所が想像できる個所を作品中から列挙 この四人の僧侶が生活しているのはどのような場所だろうか。

①庭園をそぞろ歩き(1)

③美しい壁と天井張り/そこに穴があらわれ(2) ②深夜の人里から押しよせる分娩の洪水(2)

④一人は森へ鳥の姿でかりうどを迎えにゆく/一人は川へ魚の

の器具を積んでくる/一人は死んでいるので鐘をうつ(4) 姿で女中の股をのぞきにゆく/一人は街からの馬の姿で殺戮

⑤畑で種子を播く(5)

⑦井戸のまわりにかがむ(6)

⑥非常に髙いブランコに乗り(5)

⑧洗いきれぬ月経帯/三人がかりでしぼりだす/気球の大きさ のシーツ (6)

⑨雨のなかの塔の上に(6)

⑩石垣の向うで咳をする(8)

⑪固い胸当のとりでを出る(9)

以上、十二個所挙げられる。 ⑫世界より一段高い所で(9)

あり(⑤)、開墾されているものの(②)その土地はわずかで、 井戸、高い塔、とりでがある(④⑦⑨⑪)。 石垣の外には畑が は石垣で囲まれている (⑩)。僧院の敷地内には、鐘つき場や 僧侶たちが住んでいるのは、庭園付きの僧院(①)で、

る川の流れを辿ってゆくと (⑥)、その街に行けるのだが、馬 ている(⑤)。この村は街から遠く離れていて、森の中を流れ 森の中の高い木には、子供たちが遊ぶブランコが取り付けられ 大きな森が僧院を中心とする村を取り巻いている (④)。 その

に乗っても丸一日はかかる距離である(④)。

かけ離れた現象が起こる。深夜、僧院を羊水が浸し(②)、僧 りのないように思われるが、この世界は時々、 一見、「僧侶」で描かれる世界は我々の住む世界と何ら変わ 我々の世界とは

周

にあいた「穴」は、女の陰部なのである。この女の下半身だけまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」ないほど大きくて、「三人がかり」でないとまた、「洗いきれ」を開います。

と考えられるだろう。 娩」もする。つまり、この巨大な女は、生殖能力のある若い女娩」もする。つまり、この巨大な女は、生殖能力のある若い女の「便も繰り返すようだが、この女は「月経帯」を使い、「分 街よりも大きい。「僧侶」作品世界は、女の薄暗く湿った股の

が巨大であるか想像できる。女は僧院や僧院を取り巻く村、森、が「僧侶」作品世界に登場していることから、いかに女の全身

作っている。

間に存在している世界なのである。

四人の僧侶たちの行動

で僧侶らしい「務め」が行われることは全く期待してはいない。1で「若い女」を輪姦したことを既に知っている私たちは、22は四人の僧侶たちが「務め」を行なっている場面である。な行動をとっているのかをみていきたいと思う。

んだ」僧侶であり、残る一人の僧侶は死者を安置する「棺」をを刈り取ってしまうことである。また、「祈祷」するのは「死を員が、死に関係する行動をとっていることが読み取れる。三、空員が、死に関係する行動をとっていることが読み取れる。三、四行目「聖人形をおろし/磔に牝牛を掲げ」るのは、生け贄を掛げ、一人が一人の頭髪を剃り/死んだ一人が祈祷し/他のを掲げ/一人が一人の頭髪を剃り/死んだ一人が祈祷し/他のを掲げ/一人が一人の頭髪を剃り/死んだ一人が祈祷し/磔に牝牛その予想通り、彼らの「務め」は「聖人形をおろし/磔に牝牛

このような禍々しい「務め」を行なっている時に、八行目のこのような禍々しい「務め」を行なっている時に、一年に穴があらわれ/雨がふりだす」とあるように、ただ、に「そこに穴があらわれ/雨がふりだす」とあるように、ただ、に「そこに穴があらわれ/雨がふりだす」とあるように、ただ、に「そこに穴があらわれ/雨がふりだす」とあるように、ただ、に「そでの人里から押しよせる分娩の洪水」が起こる。「分娩」と「深夜の人里から押しよせる分娩の洪水」が起こる。「分娩」と「必べることとする。

れる。おそらく、「飽食のため肥」った二人は、肉と酒というめ肥り/二人は創造のためやせほそり」と体型について述べらたいってもよいだろう。十二、十三行目でも「二人は飽食のた作品中、彼らの外見について言及されているのは、この3だけ店「手のながい一人がフォークを配る/いぼのある一人の手が目「手のながい一人がフォークを配る/いぼのある一人の手が次の3では、四人の僧侶の夕食の場面が描かれる。三、四行次の3では、四人の僧侶の夕食の場面が描かれる。三、四行

侶たちは、外見だけにとどまらない醜さであることが想像され多の口臭を吐き散らしていることだろう。このように四人の僧出し、「創造のためやせほそった」二人は、空腹による胃酸過決して質素ではない食事の残り滓を歯につけたまま、おくびを

この醜い僧侶たちが「食卓につ」き、していることとは「飽る必然性があったと考えられる。

と考えていても不思議はないだろう。

この感触を強調したいが故に、「手」という文字を繰り返し用触を「手」に感じながら、「創造」という行為に勤しんでいる。行前の「さわりながら」を受け、次の九行目、「造り上げる」はより丸みを帯びている。また、「同時に」という単語は、一おり、毛のある部分はより濃く、腰から太股にかけてのラインおり、毛のある部分はより濃く、腰から太股にかけてのラインにかかっている。猫でありながら、側路、「一次の肉体を「同時に」 具えてる。この像は「猫」と「女」、両方の肉体を「同時に」 具えてるの感触を強調したいが故に、「手」という文字を繰り返し用触を「手」という文字を繰り返し用いる。この像は「猫」という文字を繰り返し用いる。この像は「猫」という文字を繰り返し用いる。

に恐怖し、身分を剥奪されることは「殺される」ことと同じだのだろうか。そうだとしたら、僧侶たちが僧侶でなくなることのだろうか。そうだとしたら、僧侶の資格を剥奪されると、変身能力まで奪われてしまう侶は、「死んで」いるという理由のため、「鐘をうつ」だけである。僧侶の資格を剥奪されると、変身能力まで奪われてしまう名。僧侶の資格を剥奪されると、変身能力まで奪われてしまう名。僧侶の資格を剥奪されることは「殺される」とと同じだれていたろう。

るだろう。
は、日親の口はどろりとした真っ赤な血を吐いており、血と赤土がみ取れられたという個所からも、母親は殺されていることが読み取れたが詰まっている。生命の象徴ともいえる「太陽」が「沈め」をじり合ってぬかるんだ地面に母親の顔は半分埋もれ、口には母親の口はどろりとした真っ赤な血を吐いており、血と赤土が

の上にうずくまっている。「死ん」でいるという理由で、彼はの上にうずくまっている。「死ん」でいるという理由で、彼はは、単の中で声を出す」と続いているように、「死んだ」僧侶たちは歌り、一般の中で声を出す」と続いているように、「死んだ」僧侶たちに乗りながら、僧侶たちは歌う。二行前の「沈めた」という言に乗りながら、僧侶たちは歌う。二行前の「沈めた」という言に乗りながら、僧侶たちは歌う。二行前の「沈めた」という言に乗りながら、僧侶たちは歌う。二行前の「沈めた」という言に乗りながら、僧侶たちは歌う。二行前の「沈めた」という言に乗りながら、僧侶たちは歌できる。何という死者への冒涜だろうか。しかし、僧侶たちの歌は不協和音になっており、完璧なレクイェムを歌うことがの歌は不協和音になっており、完璧なレクイェムを歌うことがの歌は不協和音になっており、完璧なレクイェムを歌うことがのからずの表しているのである。そのうえ「死んだ」僧侶は、巣の中のからすのように、一人、枝のうえ「死んだ」僧侶は、巣の中のからすのように、一人、枝の方え「死んだ」僧侶は、巣の中のからすのように、一人、枝のうえ「死んだ」僧侶は、巣の中のからすのように、一人、枝のうえ「死んだ」僧侶は、巣の中のからすのように、一人、枝のうえにないましている。

「赭い」と「太陽」という言葉の繋がりで「からす」が導き出ら「からす」に喩えられているのはもちろんだが、ここでは加えて、黒い僧服を身に付けている僧侶が、外見上の理由か

ブランコにも乗せてもらえないのだ。

この吉岡の持つ言語感覚については後述する。思われる。言葉遊びとも呼べる吉岡の言語感覚と言えるだろう。まえ、十行目に登場する動物は「からす」に決定されたようには「赤鴉」もしくは「赤鳥」という別名を持つ。このことを踏されたという点を強調しておきたい。言うまでもなく、「太陽」

に「気球の大きさのシーツ」と大きさについて言及されている六行目それぞれのフレーズにかかっていると考えられ、六行目ほど大きい。五行目の「三人がかりでしぼりだす」は四行目、と、「月経帯」は「山羊の陰嚢」からできており、「洗いきれぬ」とに述べたが、もう少し詳しく「洗濯物」について見ていく

るのだ。

大いきれぬ」ほど大きい「月ととから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ととから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ととから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ことから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ことから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ことから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ことから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月ことから、数の多さではなく、「洗いきれぬ」ほど大きい「月

れているかのようでもある。「死んだ」僧侶は、他の三人から苛めら「死んだ」僧侶の行為は、他の僧侶たちの調和を乱している。を「死んだ」僧侶は、雨の降るなか、干しに行く。5と同様、の塔の上に」と6を締め括っている。せっかく洗った「洗濯物」がある。といのようでもある。

う不安定な世界が見えてくる。

の「一人は寺院の由来と四人の来歴を書く/一人は世界の花のの「一人は寺院の由来と四人の来歴を書く/一人は世界の花の仕返しするところが、いかにも苛められっ子らしい行動である。仕返しするところが、いかにも苛められっ子らしい行動である。他の三人が書いたものを焚いてぎに焚く」という個所である。他の三人が書いたものを焚いてきに焚く」という個所である。他の三人が書いたものを焚いてがしまっているが、いかにも苛められっ子の記録をつぎっているが、まるで苛められっ子のような立っては、「死んだ」僧侶が、まるで苛められっ子のような立っては、「死んだ」僧侶が、まるで苛められっ子のような立っては、「死んだ」僧侶が、まるで苛められっ子のような立りでは、

女王達の生活を書く/一人は猿と斧と戦車の歴史を書く」とい

僧侶は、立ち上がる端から次々に叩き潰していく。ここでも、が生まれそうになっていた筈であるのに、その世界を「死んだ」いている。この三人の僧侶たちが書いているのは、まぎれもなについて書く。三人目は戦争を繰り返してきた人類について書うものである。初めの一人は宗教について書き、二人目は世俗うものである。初めの一人は宗教について書き、二人目は世俗

注目すると、「僧侶」も崩壊する直前のものかもしれないとい「僧侶」という作品も、吉岡の言葉によって築かれている点に言葉によって成り立っている。そして、僧侶たちが登場する「死んだ」僧侶は、他の三人の僧侶たちが構築しようとした世界は、「死んだ」僧侶は、他の三人の僧侶たちの調和を乱している。「死んだ」

8は、「僧侶」全体を通して三個所しかない過去形のうち二をころがあるに違いない。 二、三行目の「一人は枯木の地に千人のかつが使われている。二、三行目の「一人は枯木の地に千人のかつが使われている。二、三行目の「一人は枯木の地に千人のかっが使われている。二、三行目の「一人は枯木の地に千人のかっだ」

いう生物が死に絶えた場所で、新生児が生き延びることは不可児」たちは「枯木の地」に産み出されている。「枯木の地」とたちは正常な新生児ではないだろう。その上、「千人のかくし児」という点に、まず違和感を覚える。たとえ、この僧侶が「かくという点に、まず違和感を覚える。たとえ、この僧侶が「かく上児を産んだ」

能である。僧侶は新生児を殺すために「産んだ」とも言えるだ

と同様、新生児たちが生きていくことのできない子宮を連想さ「塩と月のない海」である。「塩と月のない海」は、「枯木の地」また、次の僧侶が「千人のかくし児」を「死なせた」のは、

は、「死産」や「堕胎」といった死のイメージを喚起させる。月のような満ち欠けもない海は既に海とは言えない。この二行

の周期に合わせて起こる生理現象もないのである。塩分がなく、せる。この子宮は、満たす羊水にも塩分はなく、月の満ち欠け

品中に現われる過去形は、僧侶たちが殺人を犯している場面に母親が「殺された」ことを意味している。つまり、「僧侶」作「赭い泥の太陽を沈めた」を見ると、「沈めた」という言葉は、「僧侶」中に出てくるもう一つの過去形の、5の六行目、

使われていると言ってよいだろう。

どちらも死んでいる新生児に他ならないが、「秤」に載せていたほど述べたように、「死せる者千人」と「生ける者千人」と続く。「死せる者千人」とは、三行目の「枯木の地に」「産んだ」「千人のかくし児」を指す。/死せる者千人の足生ける者千人の眼の衡量の等しいのに驚く」/死せる者千人の足生ける者千人の眼の衡量の等しいのに驚く」/死せる者千人の足生ける者千人の眼の衝量の等しいのに驚く」

のである。

驚いている。つまり「秤」が壊れていることに気付いていないうという予想に反して、秤が水平のまま、動かなかったことにことにも注目する。この僧侶は、どちらかに秤の皿が傾くだろ

に働かない、壊れた「秤」なのである。しかもその「衡量」は「等しい」。つまり、この「秤」は正常

「秤」をもう少し詳しく見ていくと、「秤」には「蛇とぶど

- 未」をもうりしまして野へいるい一人の僧侶が「驚く」をなったすことのできないガラクタが描かれているに過ぎないのだ。ない、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付とか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付とか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付とか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付とか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付とか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付とか、男女の性交を表わすなどというように、様々な意味を付いることができるだろう。しかし、朝吹亮二氏が指摘するように、「僧侶」で使われている言葉を何かの象徴と捉えずに読うに、「僧侶」で使われている言葉を何かの象徴と捉えずに読うに、「僧侶」で使われている言葉を何かの象徴と捉えずに読うに、「僧侶」でいない一人の僧侶が「驚く」を表している。こう」が絡まっており、いかにもいわくありげな代物である。こう」が絡まっており、いかにもいわくありげな代物である。こう」が終まっている。

のでは、8でも「死ん」でいない三人の僧侶たちは、自分たちいるに過ぎないことに気付きもせず、「記録」を書いている。ん」でいない三人の僧侶たちは、自分たちが不毛な努力をして、ここで思い出すのは、一つ前の7の場面である。7で、「死

| 次の「一人は死んでいてなお病気/石垣の向うで咳をする」の不毛な作業に気付いていない。

部分で読み手は首を捻ることになる。「足」と「眼」という大るものが「死せる者千人の足」と「生ける者千人の眼」という

きさも重さも機能も異なっている器官が秤にかけられており、

あったと判明する場面である。という二行には、相変わらず除け者にされている「死んだ」僧侶の行動が書かれている。しかし、「死んだ」僧侶の行動をとっていたのに、この個所では何もせず、ただ咳き込んでいるだけである。7までは、他の三人も結局は無意味な行動をとった」僧侶と同じように、他の三人も結局は無意味な行動をとっていたに過ぎないことが、8で明らかになる。8は、「死んだ」僧侶と「死ん」でいない僧侶という対立する構図が見せかけであったと判明する場面である。

最後の章である9を見ると、四人の僧侶は「固い胸当のとり最後の章である9を見ると、四人の僧侶は、初めて四人一先述したように、巨大な女の股の間の上部にある、巨大な女の先述したように、巨大な女の子宮で、四人の僧侶は、初めて四人一先述したように、巨大な女の股の間の上部にある、巨大な女のたざしたように、巨大な女の股の間の上部にある、巨大な女のたざしたように、巨大な女の子宮で、四人の僧侶は、初めて四人一たざしたように、巨大な女の子宮で、四人の僧侶は、初めて四人一たちは、僧侶であることを放棄して、巨大な女の四児の胎児になることを選んだ。

結末を迎える。結局、僧侶たちは同じ存在だったのである。こ侶の行動は区別されていたが、9では、四人全員が死ぬという(今までみてきた1~8では、「死んだ」僧侶と他の三人の僧

れているように、四人の僧侶たちは、最初から「死んだ」僧侶ないということである。1~9まで「四人の僧侶」と繰り返さで三人の僧侶が「死んだ」僧侶と同じ存在に追いついたのでは「四児」は「死児」と連想できる。ここで注意すべき点は、9からも指摘できる。「四人の僧侶」は「死人の僧侶」であり、のことは、先述した吉岡の言葉遊びともいえる、言葉の使い方のことは、先述した吉岡の言葉遊びともいえる、言葉の使い方

許可が下りない限り、胎内でぶら下がっているのだ。巨大な女の子宮から出産されない限り、つまり、巨大な女から四児の死児である僧侶たちは、「縄」ならぬ臍の緒が切れて、まま/縄のきれる時代まで死んでいる」と締め括られている。最後、「僧侶」作品は「されば/四人の骨は冬の木の太さの

と同じ存在であった。

おわりに

除されることによって「僧侶」作品中に、一登場人物として出情侶」作品はまるで紙芝居的とでも言うべき性格を持ってい「僧侶」作品はまるで紙芝居的とでも言うべき性格を持っていくることだけではない。その場面の細かい部分は、読みかんでくることだけではない。その場面の細かい部分は、読みかんでくることだけではない。その場面の細かい部分は、読みかんでくることだけではない。その場面の細かい部分は、読みかんでくることだけではない。その場面の細かい部分は、読みかんでくることである。「僧侶」作品は方、具体的な描写がないことによって「僧侶」作品中に、一登場人物として出情侶」作品中に、一登場人物として出情侶」作品中に、一登場人物として出情侶」作品中に、一登場人物として出情侶」作品中に、一登場人物として出版のである。

するであろう。 作品が拒否していないのであれば、次のような予想もまた成立作品が拒否していないのであれば、次のような予想もまた成うそして、このように読み手側が作品へ介入することを、吉岡詩造することを可能にしている、という点が指摘できるだろう。現するわけでもないのに、巨大な女の存在を読み手が自由に創

したい。 の繋がりについては、機会を改めて論じることとら「死児」への繋がりについては、機会を改めて論じることにて生を受けるに違いない。そして、この産まれた死児の物語して生を受けるに違いない。そして、この産まれた死児の物語して生を受けるに違いない。そして、この産まれた死児の死児との見にある四人の僧侶たちは、巨大な女の子宮から分娩され

- (1) 「昭和三十三年ごろ、週末に、気が向くとよく谷川温泉(1) 「昭和三十三年ごろ、週末に、気が向くとよく谷川温泉(1) 「昭和三十三年ごろ、週末に、気が向くとよく谷川温泉(1) 「昭和三十三年ごろ、週末に、気が向くとよく谷川温泉
- 実』、一九九一年四月、思潮社)――あるいは吉岡実をめぐる走り書」『現代詩読本 吉岡執筆された、と飯島耕一氏は回想している。(「青海波また、「死児」も「非常な緊張の数日の徹夜のうちに」

(2) 飯島耕一「青海波-

――あるいは吉岡実をめぐる走り書」

- 季節』から『ムーンドロップ』まで」『現代詩読本(3)入沢康夫氏の発言。(「討議)大岡信・入沢康夫・天沢退(3)入沢康夫氏の発言。(「討議)大岡信・入沢康夫・天沢退
- に同じ。 (4)第二詩集『静物』所収の「過去」についての発言。(3)

岡実」)

- (5)三子豊一郎氏は、「こうようが繋がよごら(5)平出隆氏の発言。(3)に同じ。
- 管見」『現代詩手帖』第二三巻・第一○号、一九八○年までを感じさせる」と指摘する。(「半具象──「僧侶」さく鋭い鳴き声から、悪魔的な黒装束の動きと女の悲鳴という時間的説明のみならず、異形の動物の姿とその小(6) 三好豊一郎氏は、「こうもりが飛びはじめる夕刻まで、
- (7)「手と掌」(『イメージの冒険③「文字」』 一九七八年八十月、思潮社)
- (8) (7) に同じ。

月、河出書房新社)

(9)金井美恵子氏は、吉岡実詩作品の中の「手」の使われ方

- 一回性の言葉 現実とフィクションの混淆へ」『現代詩ず出てくる」と指摘する。(「対談 吉岡実×金井美恵子について「非常にはっきりしていて触覚との関わりで必
- (1)「そこでは 少年が四つんばいになって/サフランを摘(1)一九七三年七月、『現代詩手帖』に発表。

手帖』第二三巻・第一〇号)

んでいる」(第四、五行)

「割れた少年の尻が夕暮れの岬で/突き出されるとき」

(第十、十一行)

(3)「詩集『僧侶』以後、吉岡実の言葉は、観念としてでは書店) 書店) (2)『イメージ・シンボル事典』(一九八四年三月、 大修館

『現代詩読本 吉岡実』)位置を獲得する」(朝吹亮二「エニグム・アノニム」位置を獲得する」(朝吹亮二「エニグム・アノニム」なく、倫理としてではなく、比喩としてではなく匿名の「詩集『僧侶』以後、吉岡実の言葉は、観念としてでは

14)朝吹亮二氏は「彼らは言葉遊びではなく死人の僧侶でもといってもいいかもしれない」と述べている。(13) まる。最初には四人いた僧侶が、作品が始まるやいなやったび四人にもどる。全員が死ぬので一人の死者にもど たたび四人にもどる。全員が死ぬので一人の死者にもど 前吹亮二氏は「彼らは言葉遊びではなく死人の僧侶でも

(16)一九五八年七月、『ユリイカ』に掲載。初の長詩。

(15)(3)に同じ。